セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.12

編集
発行　1985・9・5
佐賀県立九州陶磁文化館
代表者　藤山　巌
〒844 佐賀県西松浦郡有田町中部字田ノ平乙3100－1
電話 09554－3－3681
印刷所　山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町甲2476－21

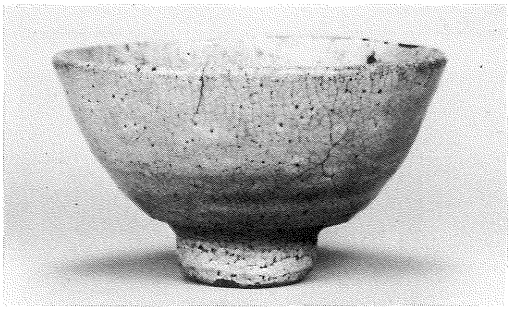
高取藁灰釉水指（たかとりわらばいゆうみずさし）　館蔵資料

福岡・高取系内ヶ磯窯（たかとり　うちがそ）
江戸初期（1614～1624年）
口径10.5cm　胴径15.8cm
高さ11.7cm　高台径 7.0cm

筑前の茶陶として名高い高取焼は、開窯以来数回にわたり窯場を移転したが、その中でも内ヶ磯窯は、創成期の窯ではもっとも多様な優品を生みだしている。この水指は、かつては唐津焼ともみられていた作行であるが、昭和55年の内ヶ磯窯跡第2次発掘調査により、同一種類の陶片が出土したため、内ヶ磯窯の製品と考えられるに至った。

開館５周年記念「九州の茶陶」展から

今秋10月12日(土)から11月17日(日)まで開催される展覧会に出品される作品の中から名品を選んで紹介します。



１．大井戸茶碗　銘「美濃」(高麗茶碗)

五島美術館　　15～16C

口径15.1cm　高さ 8.9cm　高台径 5.0cm

碗形にゆるやかにのびた形姿は温和な趣がある。高台は竹の節でやや高く、高台内まで施釉する。小さく渦状のロクロ目をみせる見込みに目跡が四個みえる。高台内外の梅花皮(かいらぎ)もおだやかで美しい。銘の由来は定かでないが、かつて美濃守を称した大名が所持していたことに因むものであろう。

大正六年、団琢磨の所蔵になり、昭和二十七、八年頃、五島慶太の所蔵となった。

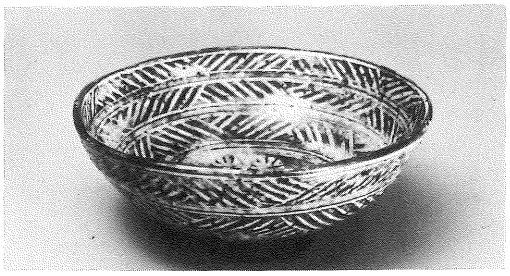
２．雨漏茶碗（高麗茶碗）

福岡市美術館　　15～16C

口径 8.7cm　高さ15.4cm　高台径 6.5cm

雨漏は茶渋が素地にしみ込んでできたものである。ふっくらとした碗形で、口縁は端反り、広い竹の節高台をもつ。高台内に縮緬皺(ちりめんじわ)がある。見込みに鏡のような茶溜りをつけ、その中に目跡が四個ある。透明な白釉をたつぷりとかけ、大きな貫入が全面にあらわれる。

内箱蓋裏に金粉字形で「くちぬるかいほりの軒のひまとめてもりくる雨のあしの八重ふき」とある。平戸松浦家旧蔵。長尾美術館、高梨家を経て松永耳庵へと伝わった。

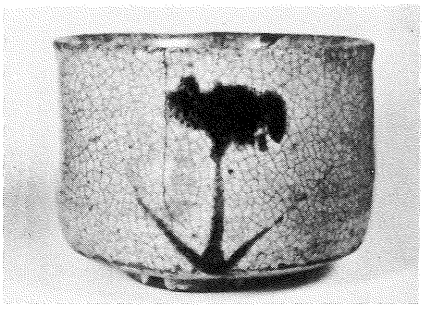


３．彫三島茶碗（高麗茶碗）

梅澤記念館　　16～17C

口径14.6cm　高さ 6.0cm　高台径 5.4cm

口縁から内外にかけて桧垣の彫り文様が外に二段、内に三段あり、見込み中央に押し型の菊文様があってそこへ白土を象嵌する。赤い素地に文様の白が映えて美しい。釉は半透明で高台内まで全面に施釉する。高台内には兜巾(ときん)が立って、縮緬皺が出ている。



４．絵唐津菖蒲(あやめ)文茶碗　正源寺窯

田中丸コレクション　　17C初

口径12.3cm　高さ 9.3cm　高台径 6.5cm

筒形で口縁がやや端反りの茶碗、高台を低く垂直に削り出し、高台内に縮緬皺がみえる。

胴の表裏に鉄砂で菖蒲を描き、高台際まで失透性の長石釉をかけて、文様がにじんで見える。絵唐津の代表的な名碗とされている。

５．上野瓢形茶入　銘「養老」(次頁左上)

遠州流茶道宗家　　17C初

口径 2.8cm　高さ 6.8cm

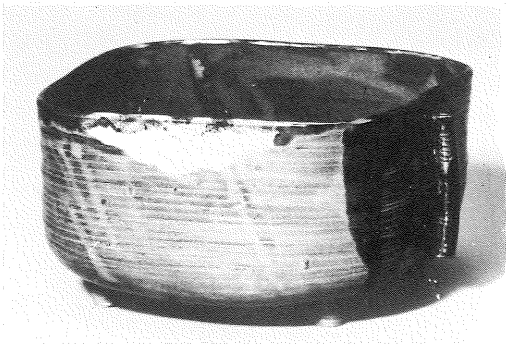
数少い上野の茶入。瓢形につくり、下の胴に一条の陰刻線文をめぐらす。胴の下半分を土見せにして褐釉をかけるが、なだれて景色となる。小笠原家伝来の名品で箱書に「松かげの　いはいの水は　くすりにて　老をのべたる　心ひさしき」の歌が詠まれている。

6．高取鶴首茶入　銘「鶴頭（つるがしら）」　白旗山窯

1630～65

口径 3.3cm　高さ 9.6cm　底径 3.0cm

遠州高取茶入の典型作とされる。唐物の鶴首茶入の形を写したもので、作行きは薄く精緻で、灰白色の土味はきめ細かく、白旗山窯独得の茶入土が用いられている。褐色の釉を地釉とし、さらに黄釉をなだれるようにかけて景色としている。「遠州蔵帳」に所載され、内箱蓋表の「高取　鶴頭」の書付も小堀遠州の筆である。



7．高取四方管耳付水指　小石原鼓窯

1665～17C

口径16.8cm　高さ 9.7cm

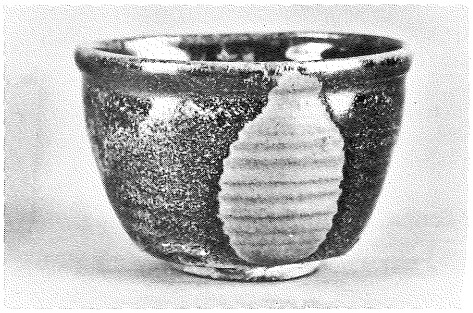
肉薄くロクロ成形してのち、押さえて四方につくった平水指。胴に細かいロクロ目がつけられている。胴の左右に細い管状の耳をつける。黒飴釉の上に白濁釉をなだれるようにかけている。

8．八代象嵌牡丹花文耳付水指　平山窯

永青文庫　18C初

巾26.5cm　高さ18.2cm

八代焼は細川家が豊前から肥後に国替になった時、三斎が上野で窯を焼かせていた上野尊楷（喜蔵）を二人の子とともに呼びよせて八代郡高田郷に窯を築かせて八代焼（高田焼ともいう）を始めたのに端を発するという。その三男藤四郎が分窯を始めたが、その孫の藤四郎は正徳（1711～15）頃、諸国をまわって修業し、象嵌技法を用いて作ったのがこの水指といわれる。



9．薩摩掛分釉茶碗　竪野窯

東京国立博物館　17C初

口径11.8cm　高さ 7.9cm　高台径 5.2cm

口が開いた半筒形の茶碗。口縁を玉縁につくる。胴にロクロ目がたつ。釉は細かな胡麻を吹く飴釉をかけ、一部に木の葉状の鉄斑をたらして景色とする。見込みにも同様の鉄斑文がみられる。広田不孤斎旧蔵。

（吉永陽三）

〈速　報〉

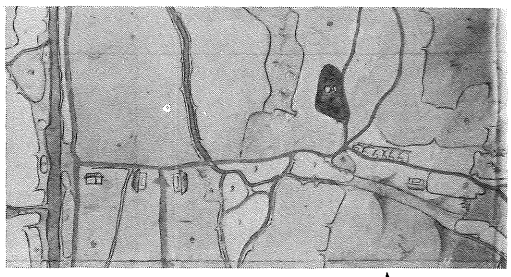
有田町南川原窯ノ辻窯跡の発掘

本年の国庫補助事業肥前地区詳細分布調査の一つとして、南川原窯ノ辻窯跡（西松浦郡有田町西部字窯ノ辻）の発掘調査を６月14日～７月13日にかけて実施した。

この窯跡は中島浩氣『肥前陶磁史考』昭和11年に「此處の製品は、全く後期時代の完成磁器である」と述べられているように、現地表には19世紀の製品が多く散布していた。地表に遺存する窯も幅7.7m、トンバイ積の窯壁から19世紀に用いられた窯と推測できる。また元治元年（1864）の絵図（鍋島家蔵）に６室の登窯が描かれている。この絵図をみると下南川原には窯ノ辻窯以外、登窯は描かれていない。

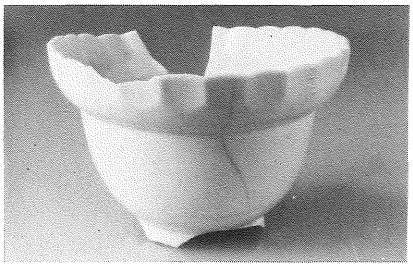
いっぽう、『皿山代官旧記覚書』や柿右衛門文書、柿右衛門家伝来の土型（在銘）によると、18世紀から幕末にかけて「下南川原登」があり、酒井田柿右衛門家はその有力釜焼（経営者）であったことが判る。この下南川原登は『皿山代官旧記覚書』文化11年（1814）には14番つまり焼成室14からなる登窯であり、柿右衛門文書文政12年（1829）にも14番とあり、うち２室を柿右衛門が所有していた。1864年の絵図では５ないし６室であるから焼成室数が違うことも、窯ノ辻窯を下南川原登と認識できなった理由かもしれない。しかしこの焼成室数の違いは、柿右衛門文書天保15年(1844)「乍恐奉願口上覚」に下南川原山釜焼が連名で「当時釜焼一統元手薄ク有之、釜数余慶ニ積入候儀不相叶候付、旧冬遂吟味、銘々分限ニ応シ、壱間或ハ半間宛致割方、火入相整候」と記しており焼成室数を減したことが判る。これが1829年と1864年の室数の差となって表われたとみて間違いあるまい。

そして今次調査は、この窯の築窯時期を知るために地表には窯の痕跡のない窯跡上方２個所を発掘した。その結果、厚さ30cm程の表土の下に３つの整地層を挟んで３つの物原層（製品・窯道具などを捨てた層）が発見された。厚さ２m～2.7mにおよぶ堆積である。この物原層には地表にみた19世紀の製品はみられず、すべて17世紀末～18世紀前半とみられるものであった。製品は上質品がほとんどであり、染付・白磁・青磁・ルリ釉・銹釉がある。その特徴は柿右衛門Ａ窯出土品に近似している。窯道具の中心がサヤであることも上質品生産の表われである。このサヤに所有者印を押捺したものが多数あり、そのなかに柿右衛門家伝来の土型にみられる㊟印と同じ印を押捺したものがかなり含まれていた。この㊟印は上南川原の樋口窯でも採集されているが、量的に多いのは柿右衛門窯である。柿右衛門窯はＡ・Ｂ２基の窯跡が発見されており、Ｂ窯→Ａ窯の順で築窯されたとみられる。以上のことから、下南川原登は柿右衛門Ｂ窯・Ａ窯から南川原窯ノ辻窯に移窯し幕末まで続いたものと考えられる。(大橋康二)

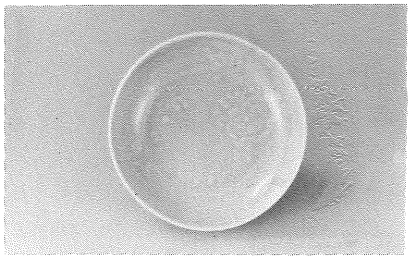


１．元治元年（1864）の絵図
南川原窯ノ辻窯部分　鍋島家蔵

２．染付唐草文碗
南川原窯ノ辻窯出土　高6.5cm底径4.5cm



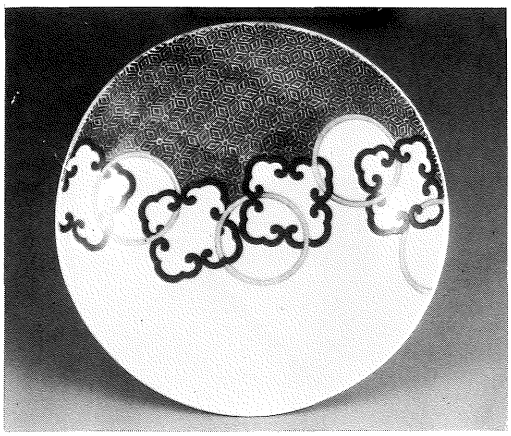
３．白磁向付
南川原窯ノ辻窯出土　口径11.2cm高7.1cm



４．青磁陽刻牡丹文皿
南川原窯ノ辻窯　口径11.8cm

シリーズ
やきものに見る文様 (10)
麻の葉文様

六角形の中に六個の菱形を結びつけ六星形をつくり、その中心と各先端を放射線で結んだ幾何学文様、その形が大麻の葉に似ているところから、近世になってこの名が生まれた。古くは平安時代の仏像の切金文様のなかや、鎌倉・室町時代の繍仏（刺繍によって仏像や菩薩などをあらわしたもの）のなかにみられるといわれる。江戸時代には染織品に多用され、まっすぐにのびる麻にあやかって、子供の産着や下着の文様として用いられた。文化・文政（1804—30）の頃、大阪の名優嵐璃寛が「妹背門松」の狂言に、麻の葉文様の衣裳で油屋お染に扮したのが評判となって「お染形」ともいい始めた。明時代の中国の古染付と同じ形をした水指が有田皿山で17世紀前半につくられるようになり、その代表的な作品の一例「染付山水文胴締水指」の背景地文に麻の葉文様が描かれている。ここに紹介する「色絵輪繋文皿」は18世紀後半の作と思われる鍋島藩窯



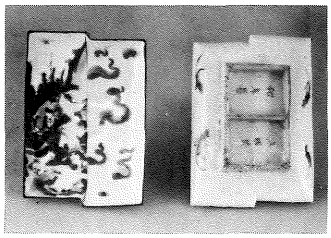
色絵輪繋文皿　鍋島藩窯　18C後半
館蔵資料

の作品であるが、中央の左端から右端にかけて四個の如意頭繋文と輪を交互に組み合わせて配し、如意頭繋文には赤の、輪には水色の上絵具で彩色している。上方背景には「墨弾き」の技法によって呉須の青地に白抜きで麻の葉文様をびっしりと描き込んでいる。この皿の図柄は鍋島藩窯では最盛期から後期までくり返して用いられており、その新旧は、裏文様で判別される。写真の作品とほぼ同様の作品が、染付青磁ではあるが、東京・旧芝離宮庭園遺跡から出土している。(吉永陽三)

シリーズ
やきものの技法 (10)
たたら成形

粘土を板状にして、その均一な厚みを利用して成形する技法。板状の粘土を組み合せるため「板作り」と呼ぶ場合もある。粘土の塊の両端に、同じ厚さの板(たたら板）をおき、その板にそって糸で粘土を切る。両端の板を一枚づつとりはずしながら切ると、板と同じ厚さの粘土板が何枚もできる。ろくろを用いない成形法として、手びねりやひも作りなどあるが、たたら成形もその一つである。ろくろ成形が回転を利用した円形の器作りにむいているのに対して、たたら成形は、板状粘土を生かした角形、箱形の器物作りにむいている。型に粘土板を押しあてて、変形皿を作る応用法もある。

起源については定かでないが、板状にした粘土による成形という意味では、相当に古くから行なわれてきた。我国における５世紀ごろの家型埴輪は、板状の粘土を組み合せて制作されているが、粘土板がスライスしてできたものかどうかが問題である。もし粘土を叩いて平たくした技法であれば、単なる「板作り」といえるであろうし、たたら板を用いていれば「たたら成形」ということになる。



染付楼閣山水図長皿
(有田皿山、17世紀中葉)
口径16.2×11.6、高さ3.5
高台径9.9×5.8cm
館蔵資料

スライスした粘土板を型にあてて成形する技法を、有田では「糸切り」と呼んでいる。一般にいう糸切りとは、茶入れなどの底にみられる渦状の糸切り跡がのこる技法をいうが、有田の糸切りはたたら成形の一種を意味している。有田には古来、変形の皿を作る方法に、「型打ち」と「糸切り」があるが、前者はろくろで皿形を作ってから土型にかぶせて変形させるのに対して、後者は粘土板によっている。また高台は型打ちの場合は、ろくろ削りによる円形であり、糸切りの場合は、外形にあわせた変形高台が多い。両技法の出現は、前者が1620年代~30年代、後者が1650年代と考えられる。　(鈴田由紀夫)

〈企画展だより〉

新収蔵品展について

□会場　第1展示室
□会期　昭和60年7月23日(火)～8月11日(日)
　　休館日　7月29日(月)、8月5日(月)
□観覧料　常設展観覧料に含む
□展示構成
　肥前の陶磁器：古唐津など……12件
　九州の陶磁器：沖縄の陶磁器など……66件
　幕末―近代の陶磁器、中国の陶磁器、近代―現代作家の陶磁器など……12件
　合計 106件

7月23日から8月11日まで新収蔵品展がひらかれました。この新収蔵品展は、当館が昭和59年度に購入または寄贈をうけた資料を公開・展示するもので、今回が初めての催しです。

今回の特色は沖縄の陶磁器57件で、それに肥前の陶磁器や九州各地の陶磁器など合計106件が展示されました。これまで所蔵品の数が少なかった沖縄の陶磁器を、しかも今日となってはかなり入手が困難となった16世紀から19世紀の製品を数多く収蔵することができ、より一層、「九州陶磁文化館」の名にふさわしい施設になったと思われます。

近年、博物館・美術館の第二の建設ブームだといわれ、全国各地にたくさんの施設がつくられています。しかし、貸ギャラリー的に使用する「うつわ」としての要請が強かった第一次建設ブームの時とはちがい、今日ではより主体性をもった館機能というものが要求されてきたといえます。そのため、色々な研究成果をふまえた特定のテーマをもった企画展、また質の高い展示品を常時展示する常設展といったことが要求されてきました。特に常設展は、その館がどれだけ質の高い展示品・収蔵品をもっているか、また収集できるかということにかかっているわけで、収集の方向が館全体の方向と密接に係わっているともいえます。

しかし、特に新設の公立館などの場合、開館時に充分な所蔵品をもっている館は非常に稀れで、多くは開館後に徐々に所蔵品数を増していくというのが通常です。それに充分な展示スペースがあり、膨大な数の展示品を保有し、じっくり観覧すれば数日を費すような大規模館ならともかく、多くの場合、限られた展示スペースに収蔵品の一部を展示し、年に数回の展示換えを行なっているのが普通で、それによって展示品の破損・劣化、また展示の定型化をまぬがれようとしています。そして観覧者に何度となく足を運んでもらうようにしているわけです。

新収蔵品展は、いわば新しい収蔵品のおひろめですが、それは館の研究の成果であり、また今後、常設展を充実していくために、どのような資料が必要なのかを考える良い機会だといえます。

今回の新収蔵品展においても、沖縄出身の方から「なつかしいですね。今は沖縄でも少ないですよ」という声をいただき、改めて収集・展示の意味を考えさせられました。　（宇治　章）

利　用　案　内

開　館　午前9時～午後4時30分　月曜休館　年末年始休館　12月28日～1月4日
観覧料　一般150円（100円）／大学・高校生100円（70円）／中・小学生50円（30円）／（ ）内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度別に定めます。
交　通　佐世保線有田駅下車徒歩15分